

沼尻絳一郎編輯
西南太平記

十五号

下



10

15

20

25

30

A434
22
也

西南太平記十五編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第三十回

逆將佐土原城へ繰り込む
并高知縣の兩名拘引なる

既小西南事件の始トめ東京警視局より各地
へ出張され一惣人員凡そ八千三百六十九人
みて當時東京小有る巡査の現員ハ六千人
り又勢州桑名の舊知事公ハ五月二十六日其

西南太平記

十五編下

48-7805

舊藩士族へ懇心する告諭書を渡され大義
 名分を誤らぬやうにと諭され 巡査徴募に應
 じて士族の義務を盡すべしと有りけき各
 憤發し百人餘り速に是に應じたる其中服部
 正義町田武須計、立見尚文らとい戊辰の年
 皆戦地ありて幕臣及び會藩と共に名を得た
 る人あり又福岡舊知事黒田公より先頃暴動
 の為人民の家を焼失し殊に死亡の者負傷

の者らとへ金六千圓を施與しとして福岡
 縣令渡邊氏へ依頼せしと今回英國四十八番
 館の持船カンテヤ號と云ふ船にて二千五百
 八十噸積るると十五方圓にて買入るあり名
 と天草丸と改め六月四日有馬三等大警部と
 始り巡査千二百人と乗せ横濱港を抜錨し
 西海へ向けて出帆したり
 行在所に於て使府縣へ左の二ヶ條の布達あり

り

別紙の通り内務海陸軍三省へ相達候此
旨相達候事

明治十年五月卅日

太政大臣三條實美

官用の為め銃砲弾薬買入候節其都度前
以て其関係之地方廳へ照會の上可取計此
旨相達候事

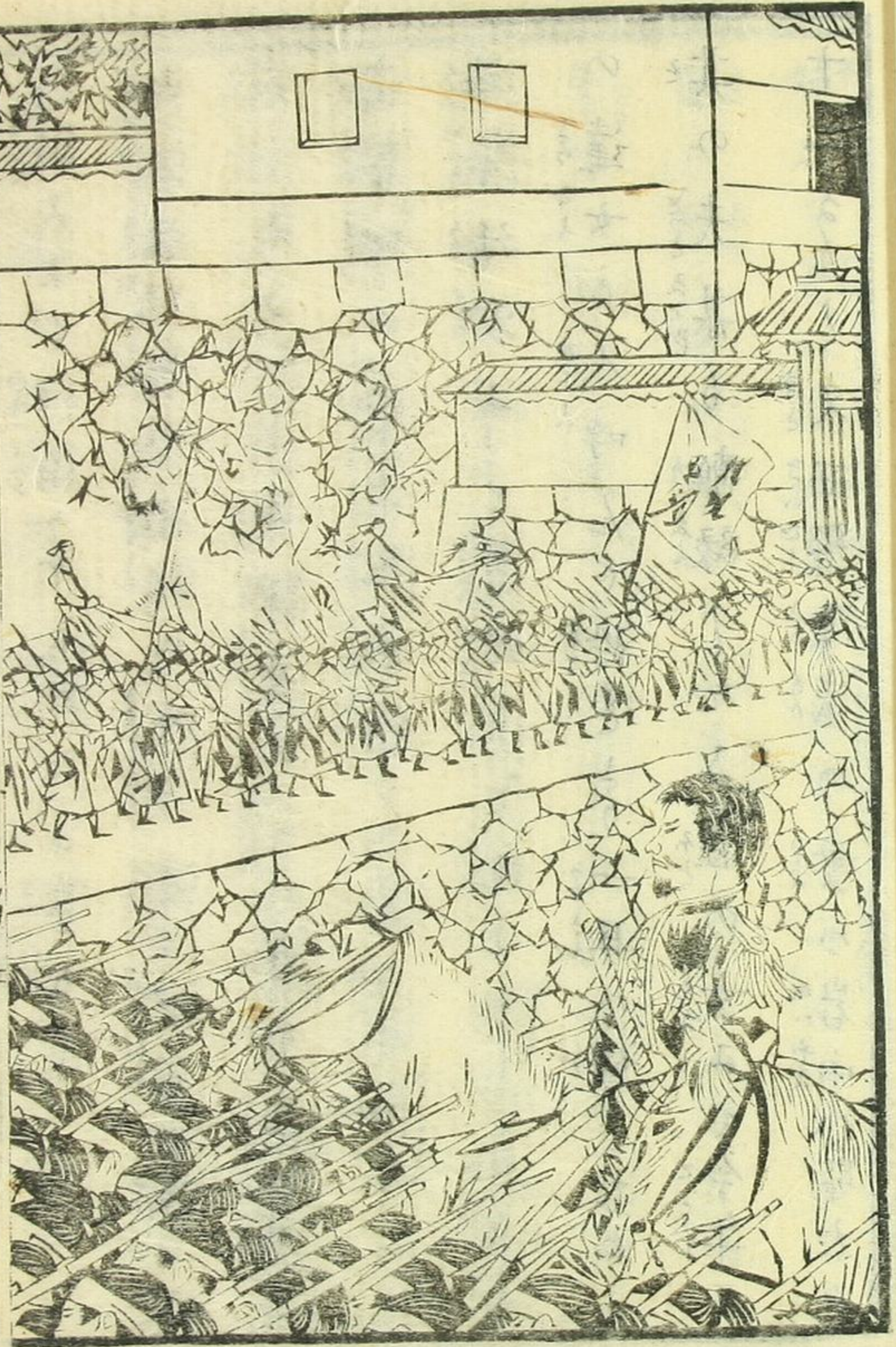
明治十年五月三十日

太政大臣三條實美

亦六月二日午前十一時ころ秋良木駅の兇徒を
追ひ拂ひ同夜十一時頃巡查を引纏め直又萩
地に進む途中大谷より萩市中に至るまで捕
縛する残徒数名即今人民安堵の思ひとる
すしと出先より報知せり又縣令直又萩へ出
張り去る一日午後二時ころ官軍八人吉に討入
り市街に放火をりて僅ふ二十餘戸を刺さ
ず兇徒の日向路の加久藤越小退き逃れ官軍

兇徒の砲壘を陥入きて分捕の器械は櫻の彫
 あるを以て櫻島ふて製造と知る却説西郷
 大将の入吉は本營を移し而して高千穂より出
 發するにその後二大隊の精兵を従いて佐土原
 城へ籠らんと日向路に廻陣して入吉よりも
 追々佐土原城を據ると云ふ既にして去る五月
 三十一日七時官軍臺兵と合し進軍し逆徒
 と追撃午前九時入吉へ進軍市中の放火川

を隔て哨線を保てり官兵屯田も死傷五名
 之れあり又鹿兒島縣令岩村氏が入縣せら
 れし以来縣下へ布達されたる條件は本月
 中旬まで總十日をかりの間は二十二号まで
 鎮撫も厚く注意せらるる甲斐ありて帰順の
 者も多しとの事あり逆徒も迫られて金穀
 と出したり者又逆徒も隨ひて出兵せし者の
 帰順并に療養願書式までも定められし



逆將佐土
原城又掘
んとする

誠まことよく行届ゆきとどせられたる事ことなり
 却説さて鹿兒島かぎしまの兇徒きやうとの女房達むすめたちが官員くわんいんの家いへを破こ
 毀こ一ひとあるいと其隊長そのうちうぢの女むすめ鹿兒島かぎしま旧城下ふるまがらひ
 高麗町かうらいまちの伊集院いじくわん兼徳かねとくとつゝ人の伯母おばよて
 性質うまれつき活潑あちみりて男増おとこりを通りて無む法はふ者もの
 の達女たちと人呼ひとよんで恐おそきより一旦ひと嫁かれたれど
 其そのの夫某とつとも離縁りえんしたる程ほどの女むすめよて今年五
 十二じふにありと又西郷隆盛さいきやうりゆうせいの妻つまハ岩山八郎太いんやまの

姉あねよて是これハ随分ずいぶん温厚おんこう性質うまれつきの女むすめのよ一ひと此この女むすめ
 隊たいハ船ふねよて何方どこへり立退たちひきき一ひととつゝ六月四日
 午後一時四十五分ごごいちじしふご逆将さかじやう貴島清勢きしまきよせいの一手ひとてハ半
 隊長うちうぢ鹿兒島かぎしまの官軍くわんぐんよ降伏かうふくせり逆徒さかとの一将いちじやう桐
 野利秋のりあきが四國しこくよ渡り一ひととの説せつハ鹿兒島かぎしまふ於あ
 て降伏かうふくの兇徒きやうとの口くちよ出るも豊後ぶんごの鶴崎白杵つるさきしらき
 等らうの地ちハ伊豫地方いよちほうよ近ちかき由る既すでよ海岸くわんげんの警けい
 備ひを嚴げんよせられ一ひと趣おもひハ前説ぜんせつの如ごとく鹿兒島かぎしま

又官兵のあつて再度郷里に帰るの途を失ひたりと決心して勇進を意とせんも計り難けきを及ばぬまでも海を超えて四國を搔擾せしめむんば又豊前地方に向はんとな企てずとも去ひがと一聞く官兵の鹿見島あり守備を嚴よりて兇徒の歸り襲ふを防ぎ豊後路へ第二旅團の兵二大隊を發し野崎中佐が是を率て小倉より出大分別府へ趣

りんとせしむるより兇徒の意を進撃し傾けたると防ぐんと疾その畧を廻らされしをるへ一又豊後の暴徒勢ひ熾んよりて竹田城と再とひ奪ひたり遂水郡の土民に嘯集して縣廳へ歎訴する事ありと迫りたり既に逆將桐野利秋が四國へ渡りしとの降伏の兇徒等の口より出し前号を記せしが高知縣より藤吉村松の二人が何人の使より

たち微行して桐野を面會せし兎徒より分
捕の書中より有りきと頃日豊後又暴威と
遅ふしと官兵又抗ずる逆兵の將ハ則ち桐
野ありと逆中より今や桐野利秋が四國を
渡りつらんとありし者もありしありべく
桐野が胸算も或ひハ豊後路の各所は出沒
一隙を得ば四國を渡らんと謀りしも知る
べからず然ると疾くありはれて官兵の戒

嚴を加へし偏し諸將の注意深きよるりの
あり此他逆兵の降伏陸續として虚日なく中
よ就て大河内口なる官軍の哨兵線を降伏せ
しものハ元九番大隊現今破竹隊二番中隊右
半隊分隊長ふて大隅の郷士福島安同隊の
押伍田中藤之進鈴木彌助等逆將の脅迫に
一時ハ官軍を抵抗せしが素より本志を替
る事もある逸れて爰に降伏せりと一書とさ



逆徒官軍
一書とさげ
爰に降伏す



げて逆兵の現今拳動を包藏さず演述する
たるい殊勝こそあるべしと

然も逆将桐野利秋の高知縣下立志社員
の藤吉村松の二人は宍切を往復せしと高知縣

出張の警察方が藤吉村松の往復を探偵
して忽ち捕縛し大坂へ送られ即日西京の

内務省より別段嚴重の警衛を以て大坂府
より警部巡查三十人ほど付き西京へ送

りよありしと云ふ逆将桐野が豊後路を

巡廻せしと茲に人吉落城後の逆情は大

口ぐち田野加久藤口の木場等も引き退

き人吉より凡そ二三里ぐらゐの要所も壘を

築きたり官軍進撃し壘も扱ると又陸軍

中尉横井逢時を過日本木の葉もあり戦地

より四月七日よその親父鏗叟老人の由

とへ和歌山送られし書中よ

紅よれど血一布み流りてや

のま開むの色どはひある

右の歌をかき一がその日木の葉の戦ひふ討
死せられ一うば官軍苦戦あり我を横井中尉
がその折りの働きの敵も味方も天暗の英
雄かると目やおどろかしたる善不どの花々
き勇戦まり一と最期の節詠れたる詩
歌とあつめ鶯花血涙集と名づけけらる

一とく云ふ

續て四月十五日熊本の圍と解けて四方の
官軍入城一喜悦の眉をひらくとくども
逆徒の遠くも引退ぞうば大津御船又落
集り折りを忍て一時又討ておんず景
況ありと探偵のりより報むれを此の圖
をなげさず撃ち拂へとて則ち別働隊三旅
團の巡查あふよそ其の人数六百餘人又過

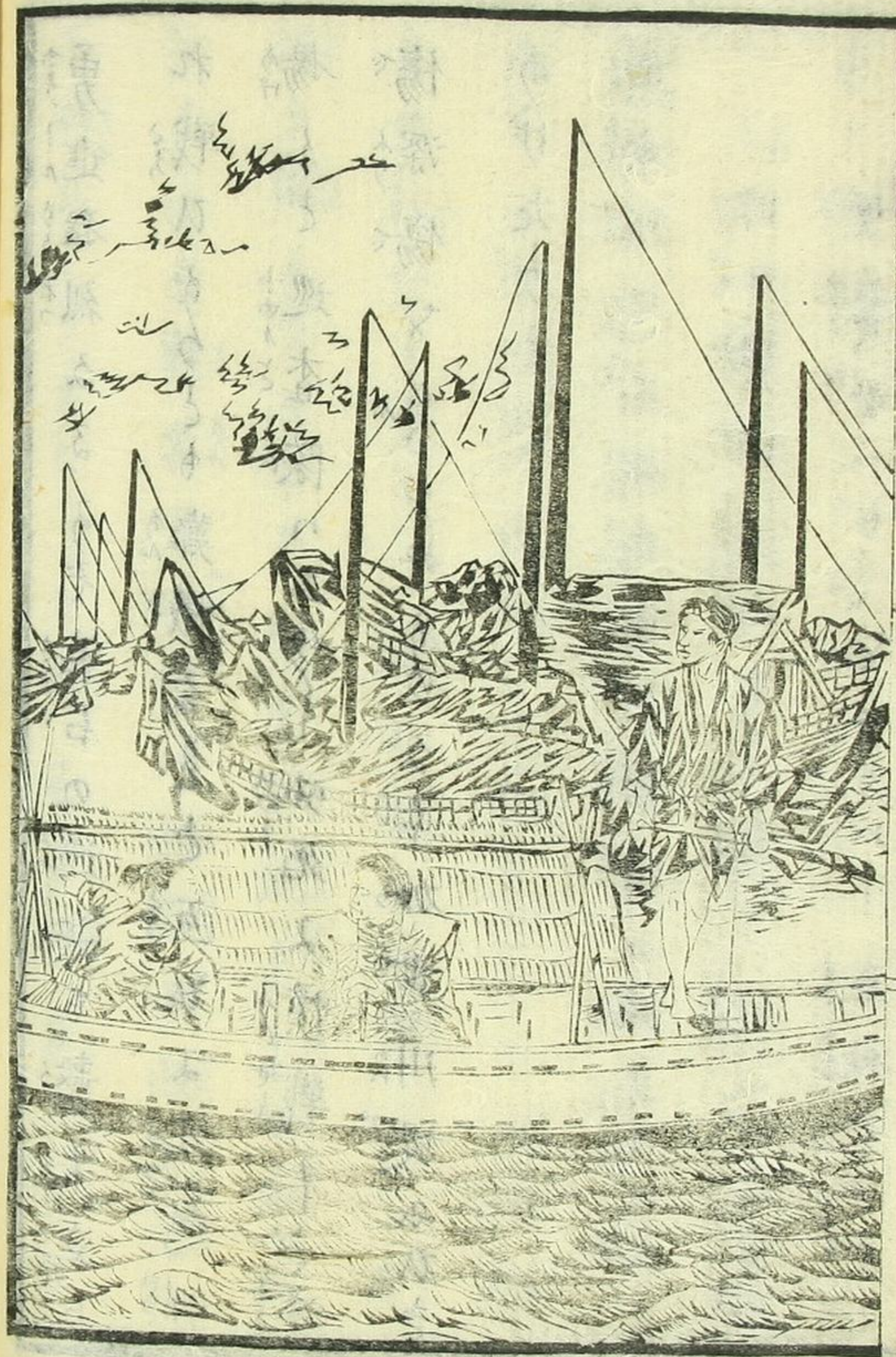
ち立て一挙に撃んと進軍し終に御船
 間近くを寄せるを斯くと逆徒も知り
 たるより此處彼所を兵をくむり御船川
 まで行をりふ一時に起つて撃つていで追
 取り圍んでまゝをひかきをを巡查右田藤七郎
 とをとりぬ数名の巡查の四方に敵を受け
 て戦ひにぐすこりも屈する色なく勢ひ

勇進猛烈なるるど流石の逆兵も撃ち立ち
 れ戦ひりつとも難儀るほど互ひに左右へ引
 揚んと巡查隊のあつて必死に憤戦して淺
 傷深傷を負ひぬるるに加世川堤みひき
 あげたりと

熊本縣岩尾俊貞書状前號の続き左の如し
 昨日奥田木山より参り候ふつき養祖
 母養母へもををつりい直様あひ見え



逆將相野海邊に望
 不四國を窺ひんとす



お豊か常も打ち寄り久しぶり又て寛
話盃を傾け申候

一体官軍すべての内ふても近衛兵と廣

島鎮臺の評判たらく田原坂の苦戦

も名譽のたの両手みて引受けたりが

如し総トて「俊方」の岩尾俊貞の弟又

て奥田氏の養子とあり當時陸軍大

尉みて戦地出張のありむき 上文の奥

田とあるのするのち俊方の事あり始

終憤戦高臺場の發明なども俊方よ

りをとまりたりよし又て怪我もあらく

何よりのことあり且つ右の田原の苦戦

も有りたるゆゑり此の両軍のいまだ

繰り出しとるるく廣島隊の未だ水

山又休兵せり逆軍の死傷五千と唱へ

さのくんども初戦以来繰り替へるの

兵よる餘程困弊り居り候ゆども
 本月二十日以来逆徒の唯適る斗り少
 一の勞も止ま申すべきり何さぬその
 兵の衣服器械をえるよさなぐら鋤
 と投捨たるをりの農兵よて近來相
 成り繰り出りたる人数のりとも拙
 い相見え候ゆも果敢くしきととい
 出来る様も併り未ど残兵も大数六

七千の可有之一且日向路もかりたれ
 ども入薩のむがり可有之左されバ
 延岡の佐土原へんへ輻湊して今一戦
 争はこそあるべく蓋し細の魚よて最
 早譯のま
 借も高知縣より使よ來り日向よて桐野
 利秋等も面會為りたる藤吉静村松正
 勝の兩人を西京へ拘引さきたりと

西南平諺

十五編下

蓋し海とその後よりりて四國海岸をい
いと厳しく船固めが付き今般の布達
の左の如し

行在所布告第七号

鹿兒島賊徒大分縣下へ散乱し追々
四國地方へ遁走致すべく哉の聞え
ゆこそあり候ふ付て伊豫土佐海岸
ハ豊後日向接近の地方よりつき今般

別し右沿海諸港出入の諸船も
おいて陸海軍嚴重取締いし候
條此旨布告候事

但し右取締に付出入の船舶
しきと認るときは軍艦より滞止
し命ず若し之れを拒むるときは臨
機嚴重の處分も及ぶべき事

明治十年六月七日 太政大臣三條實美



土州の藤好
 村松西京へ
 拘引みまろ



既^ナ大分^{あひの}縣^{せん}下^の景^{けい}况^{きやう}問^{もん}合^{あひ}の^の為^{ため}去^さる^る四^よ日^{にち}
 當^{たう}地^ちと^と差^さ立^たた^てる^るめ^の同^{どう}五^ご日^{にち}午^ご後^ご三^{さん}時^じ白^{はく}杵^し
 街^{まち}道^{どう}大^{たい}分^{ぶん}より^の二^に里^りを^をり^り先^さき^の横^{よこ}尾^お村^{むら}よ^て
 大^お山^{やま}少^{せう}将^{しやう}又^{また}遇^あひ^ひと^と云^いふ^の戰^{せん}地^ちの^の事^{こと}情^{じやう}聞^き
 出^いて^て還^{かへ}り^り報^{ほう}ト^て兇^{きやう}徒^とハ^ハ白^{はく}杵^し又^{また}千^{せん}五^ご百^{ひゃく}人^{にん}
 重^{じゆう}岡^{かう}又^{また}千^{せん}人^{にん}を^をり^り屯^{とん}聚^{じゆう}一^{いつ}白^{はく}杵^しの^の周^{しゆう}田^{でん}ハ
 嚴^{げん}重^{じゆう}不^ふ臺^{たい}場^{ばう}を^を築^まき^き兇^{きやう}徒^とハ^ハ多^{おほ}く^く鹿^か兒^ご島^{しま}
 人^{にん}よ^よ一^{いつ}て^て銃^{じゆう}器^きハ^ハ雜^ざ種^{しゆう}な^なき^きと^とも^も「スナイド

ル^ルと^と携^たさ^さへ^へ白^{はく}杵^し不^ふ向^{かう}ふ^ふ頻^{しん}り^りと^と進^{しん}撃^{げき}な^なす
 官^{くわん}軍^{ぐん}ハ^ハ宇^う多^た枝^え三^{さん}重^{じゆう}の^の市^{いち}の^の方^{ほう}位^いふ^ふあり^り大^{たい}
 飼^{かい}み^みも^も若^わ干^{かん}官^{くわん}兵^{へい}と^と出^いせ^せり^りと^と
 去^さる^る二^に日^{にち}又^{また}ハ^ハ奥^{おく}少^{せう}佐^さガ^ガ一^{いつ}時^じ大^{たい}分^{ぶん}又^{また}籠^{ろう}城^{じやう}せ
 一^{いつ}と^とこ^ころ^ろ三^{さん}日^{にち}の^の夕^{ゆふ}刻^{こく}堀^{ほり}江^え中^{ちゆう}佐^さの^の手^て戸^こ次^じ又^{また}
 退^{たい}出^{しゆう}して^{して}連^{れん}絡^{らく}を^を付^{つけ}た^たる^る由^{よし}又^{また}同^{どう}四^し日^{にち}又^{また}城^{じやう}と
 退^{たい}出^{しゆう}し^し横^{よこ}尾^お村^{むら}又^{また}出^いた^たり^り松^{まつ}橋^{はし}を^を築^まし^し官^{くわん}軍^{ぐん}
 の^の大^{たい}隊^{たい}大^{たい}分^{ぶん}縣^{けん}下^の又^{また}着^{ちやく}す^する^るあり^り

茲^{こゝろ}又^{また}愛媛^{あゐゑ}縣^{けん}にて舊^{ふる}松山^{まつやま}の士族^{しぞく}を護衛^{ごゑい}の諭^{ごん}達^{たつ}あり四國^{しこく}を嚴重^{げんじゆう}とすその他^{その他}佐田^{さた}へも巡查^{じゆんさ}と出張^{しちやう}せりめて豊後^{ぶんご}後路^{ごち}の兇徒^{きやうと}の爲^{ため}あり又^{また}備へられたりと

又^{また}姫路^{ひめい}分營^{ぶんゑい}の臺^{たい}兵^{へい}ハ九龜^{くぐい}又^{また}移^{うつ}して海岸^{かいがん}の要地^{ようち}又^{また}砲臺^{ぱうたい}と築^{きず}き専^{せん}ら嚴重^{げんじゆう}とせられたるなり

近來^{ちんらい}の激戰^{げきせん}又^{また}至^{いた}りてハ人吉^{ひんきち}と擊^{うつ}て陥^{おち}入れた

るときと以^{もつ}て第一^{だいいち}とす既^{すで}又^{また}最初^{さいしゆ}山田^{やまだ}少將^{せうしやう}ハ各旅團^{かくりよん}の向^{むか}ふところと定められ五月^{ごご}三十日^{じつ}と一^{いつ}手^て始めと一^{いつ}早天^{さうてん}より諸道^{しよどう}并^{なら}び進^{すす}む又^{また}中^{ちゆう}就^{じゆう}少將^{せうしやう}ハテルカク通りより井口^{いぐち}又^{また}進^{すす}まれ本月^{こんげつ}一日^{いつにち}午前^{ごぜん}九時^{くじ}ころ人吉^{ひんきち}又^{また}進^{すす}撃^{げき}せらるる

たまた逆兵^{ぎやくへい}大^{おほ}ハ狼^{ろう}狽^{さい}一^{いつ}糧食^{りやうじき}及^{およ}び諸器^{しよき}械^{けい}又^{また}至^{いた}るまで他^た又^{また}運轉^{うんてん}せる暇^{いとま}なく城下^{じやうげ}又^{また}水^{みづ}を放^{はな}ちて米^{こめ}良^ら峠^{とが}又^{また}遁走^{とんそう}爲^なすの或^{ある}ハ加久^{かひさ}藤^{とう}

とさして走りてありし實又賊の意外に出たるが
此進撃中屯田兵の一隊の堀大佐が引率にて
川島及び隈川より進むところの兵と連絡し
嶮岨と恐れず攻撃す此方面に向ひたる賊將
ハ彼の有名なる淵を運平にて一時防戦あり
たれど屯田兵が猛進破竹の如くよりて遂に
吉田又敗を取り辛ふ下て其場を引退きたり
と云ふ

是より日向の重岡大戦争續て豊後路
攻撃の第十六編に記載をべし

西南太平記十五編卷之下終

明治十年六月十五日 御届
全 十年八月七日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

編輯兼

出版人

沼尻絰一郎

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本專賣書屋

山口屋藤兵衛	藤岡屋慶次郎	丸屋善七	須原屋佐助	和泉屋吉兵衛	須原屋新兵衛	岡田屋嘉七	出雲寺萬次郎	和泉屋金右衛門	須原屋伊兵衛	三家村佐兵衛	和泉屋市兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋茂兵衛
周防岩園	豐後佐伯												
米谷助右衛門	東圓作	河内屋文助	袋屋龜次郎	大坂屋藤助	紀伊國屋梅次郎	紀伊國屋源兵衛	内藤支店	村屋上店	山城屋政吉	和泉屋勘右衛門	雁金屋清吉	森屋治兵衛	

東京

東京

西

京

越後高田

菱屋孫兵衛
勝村治右衛門
出雲寺文次郎
田中屋治兵衛
吉野屋仁兵衛
吉野屋甚助
堀屋仁兵衛
堀屋九兵衛
丹波屋徳次郎
錢屋總四郎
菴屋宗八郎
田中屋專助
須原屋平右衛門
小田勝太郎
小方長吉

大

常州太田

河内屋喜兵衛
河内屋善兵衛
河内屋源七郎
近江屋平助
敦賀屋九兵衛
秋田屋太右衛門
河内屋太和助
河内屋茂兵衛
河内屋吉兵衛
河内屋徳兵衛
河内屋卯介
河内屋龜七
宮尻茂平
田栗城

尾州名古屋

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

永樂屋東四郎

萬屋東平

菱屋藤兵衛

菱屋平兵衛

美濃屋伊六

高須又八

古澤良作

酒井忠三

松屋好五郎

白木屋藤吉

岡安慶助

柏屋善七

國本吉右門

車平次郎

藤屋傳右衛門

駿州沼津

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

本屋浦吉

本屋壽二郎

木屋源介

浪花屋市藏

須原屋善藏

東屋俊平

伊勢屋清七

谷尾屋源三郎

白木屋健二郎

松原惣太郎

本屋文吉

山本龜太郎

中島屋富三郎

吉田屋善太郎

篠田伊十郎

